

## 第12章 補充法則と相互法則の証明

### 12.1 補充法則の証明

この節では、補充法則 (定理 11.7) を証明する。まず、第1補充法則はオイラーの規準から直ちに導かれる。第2補充法則を示すために、恒等式

$$(x^2 + 1)^p = \sum_{j=0}^p {}_p C_j x^{2j} = \sum_{j=0}^{\frac{p-1}{2}} {}_p C_j x^{2j} + \sum_{k=0}^{\frac{p-1}{2}} {}_p C_{p-k} x^{2(p-k)} = \sum_{j=0}^{\frac{p-1}{2}} {}_p C_j (x^{2j} + x^{2p-2j})$$

が成り立つことに注目する (ここで、 ${}_p C_{p-j} = {}_p C_j$  を用いた)。これを  $x^p$  で割れば

$$(\heartsuit) \quad (x + x^{-1})^p = \sum_{j=0}^{\frac{p-1}{2}} {}_p C_j (x^{p-2j} + x^{-(p-2j)}).$$

一方、1の8乗根  $\eta = e^{\frac{2\pi i}{8}}$  について、 $\eta + \eta^{-1} = \sqrt{2}$ 、 $\eta^3 + \eta^{-3} = -\sqrt{2}$  を確かめるのは難しい。さらに、 $\eta^8 = 1$  より、

$$\eta^n + \eta^{-n} = \begin{cases} \eta + \eta^{-1} = \sqrt{2} & (n \equiv \pm 1 \pmod{8} \text{ のとき}), \\ \eta^3 + \eta^{-3} = -\sqrt{2} & (n \equiv \pm 3 \pmod{8} \text{ のとき}). \end{cases}$$

すなわち、任意の奇数  $n$  に対して、 $\eta^n + \eta^{-n} = (-1)^{\frac{n^2-1}{8}} \sqrt{2}$  が成り立つ。そこで、 $\eta$  を恒等式  $(\heartsuit)$  の  $x$  に代入し、両辺を  $\sqrt{2}$  で割れば、

$$2^{\frac{p-1}{2}} = \sum_{j=0}^{\frac{p-1}{2}} {}_p C_j (-1)^{\frac{(p-2j)^2-1}{8}} \equiv (-1)^{\frac{p^2-1}{8}} \pmod{p}.$$

これとオイラーの規準から第2補充法則が得られる。

### 12.2 ガウス和

平方剰余の相互法則 (定理 11.6) には様々なタイプの証明があるが、どれもちょっとずつ難しい。ここではガウス和による証明の概略を述べる。前節の補充法則の証明では複素数  $\eta$  (= 1の8乗根) が使われたが、ここでは、奇素数  $p$  に対して、1の  $p$  乗根

$$\zeta_p = e^{\frac{2\pi i}{p}} = \cos \frac{2\pi}{p} + i \sin \frac{2\pi}{p}$$

を用いる．

定義 12.1 奇素数  $p$  に対して，

$$\tau_p = \sum_{a=1}^{p-1} \left(\frac{a}{p}\right) \zeta_p^a$$

と定め，これを  $p$  に関するガウス和という．

この節の目標は次の定理の証明である．

定理 12.2  $p$  を奇素数とすると， $\tau_p^2 = (-1)^{\frac{p-1}{2}} p$  が成り立つ．

証明の前にいくつかの補題を用意する．

補題 12.3 奇素数  $p$  と整数  $s$  に対して

$$\sum_{a=0}^{p-1} \zeta_p^{as} = \begin{cases} 0, & p \nmid s \text{ のとき,} \\ p, & p \mid s \text{ のとき} \end{cases}$$

が成り立つ．

証明  $p \mid s$  のときは明らかだから，以下， $p \nmid s$  を仮定して，和が 0 になることを示す．恒等式  $x^p - 1 = (x - 1)(x^{p-1} + \cdots + x^2 + x + 1)$  に  $x = \zeta_p^s$  を代入して

$$(\zeta_p^s - 1) \left( \sum_{a=0}^{p-1} \zeta_p^{as} \right) = \zeta_p^{sp} - 1 = 0.$$

$s$  が  $p$  の倍数ではないから， $\zeta_p^s - 1 \neq 0$  であり，示したい式を得る．

補題 12.4 奇素数  $p$  に対して， $\left(\frac{a}{p}\right) = -1$  をみたす整数  $a$  が存在する．

証明 写像  $f: (\mathbb{Z}/p\mathbb{Z})^\times \rightarrow (\mathbb{Z}/p\mathbb{Z})^\times$  を  $f(a) = a^2$  によって定義する．もし，すべての  $a$  ( $1 \leq a \leq p-1$ ) に対して  $\left(\frac{a}{p}\right) = 1$  ならば， $f$  は全射である． $(\mathbb{Z}/p\mathbb{Z})^\times$  は有限集合なので  $f$  は単射でもあるはずだが， $f(\bar{1}) = \bar{1} = f(\overline{-1})$  および  $\bar{1} \neq \overline{-1}$  より矛盾である．

補題 12.5  $p$  を奇素数とすると， $\sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right) = 0$  が成り立つ．

証明 前補題のような整数  $a$  をとれば，とくに  $a$  は  $p$  と素だから， $t = 1, 2, \dots, p-1$  のとき， $at$  の  $\mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$  における剰余類は， $\bar{1}, \bar{2}, \dots, \overline{p-1}$  全体にわたる．したがって，

$$\sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right) = \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{at}{p}\right) = \left(\frac{a}{p}\right) \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right) = - \sum_{t=1}^{p-1} \left(\frac{t}{p}\right).$$

よってこの和は 0 であり，示したい等式を得る．

定理 12.2 の証明 まず，

$$\tau_p^2 = \left( \sum_{a=1}^{p-1} \left( \frac{a}{p} \right) \zeta_p^a \right) \left( \sum_{b=1}^{p-1} \left( \frac{b}{p} \right) \zeta_p^b \right) = \sum_{a=1}^{p-1} \left( \sum_{b=1}^{p-1} \left( \frac{ab}{p} \right) \zeta_p^{a+b} \right)$$

の最右辺内側の和について， $b = at$  とおけば， $b = 1, 2, \dots, p-1$  のとき， $t$  の  $\mathbb{Z}/p\mathbb{Z}$  における剰余類は  $\overline{1}, \overline{2}, \dots, \overline{p-1}$  全体にわたるから，

$$\tau_p^2 = \sum_{a=1}^{p-1} \sum_{t=1}^{p-1} \left( \frac{a^2 t}{p} \right) \zeta_p^{a+at} = \sum_{t=1}^{p-1} \left( \frac{t}{p} \right) \sum_{a=1}^{p-1} \zeta_p^{a(t+1)}.$$

ここで，補題 12.3 から

$$\sum_{a=1}^{p-1} \zeta_p^{a(t+1)} = \begin{cases} p-1, & t = p-1 \text{ のとき,} \\ -1, & 1 \leq t < p-1 \text{ のとき} \end{cases}$$

がわかるから，補題 12.5 より

$$\tau_p^2 = \sum_{t=1}^{p-2} \left( \frac{t}{p} \right) (-1) + \left( \frac{p-1}{p} \right) (p-1) = - \sum_{t=1}^{p-2} \left( \frac{t}{p} \right) + \left( \frac{p-1}{p} \right) p = \left( \frac{-1}{p} \right) p.$$

よって，第 1 補充法則（定理 11.7）より定理を得る．

## 12.3 もっとガウス和

前節ではひとつの奇素数  $p$  についてのガウス和  $\tau_p$  の性質を見てきたが，この節では別の奇素数  $q$  をとって， $\tau_p$  と  $q$  がどのように絡むのかを調べる．実際には，次の定理の証明がこの節での目標である．

定理 12.6  $p, q$  を相異なる奇素数とすると，

$$\tau_p^{q-1} \equiv \left( \frac{q}{p} \right) \pmod{q}$$

が成り立つ．

まず注意すべきことは， $q-1$  が偶数になるので，定理 12.2 より， $\tau_p^{q-1}$  は整数になることである（だって，整数じゃないと合同式の意味がわかんなくなっちゃうもん）．

さて，証明の前に，集合  $R = \{ f(\zeta_p) \mid f(x) \text{ は整数係数の多項式} \}$  を考える．たとえば  $\tau_p \in R$  である．明らかに  $R$  は和，差，積について閉じている．すなわち， $R$  の任意の 2 元  $\alpha, \beta$  に対して  $\alpha + \beta, \alpha - \beta, \alpha\beta$  は  $R$  に属する．さらに，次の補題が成り立つが，この証明はかなり難しい．ここでは，これを認めて定理 12.6 を証明する．

補題 12.7  $R \cap Q = Z$ .

定理 12.6 の証明 まず, フェルマーの定理と二項定理を繰り返し用いれば, 任意の整数係数多項式  $f(x)$  に対して

$$f(x)^q = f(x^q) + qg(x)$$

をみたす整数係数多項式  $g(x)$  がとれることがわかる. よって, ある  $\alpha \in R$  があって

$$\tau_p^q = \sum_{a=1}^{p-1} \binom{a}{p} \zeta_p^{aq} + q\alpha$$

と書くことができる. さらに,

$$\sum_{a=1}^{p-1} \binom{a}{p} \zeta_p^{aq} = \sum_{a=1}^{p-1} \binom{aq^2}{p} \zeta_p^{aq} = \left(\frac{q}{p}\right) \sum_{a=1}^{p-1} \binom{aq}{p} \zeta_p^{aq} = \left(\frac{q}{p}\right) \tau_p$$

と変形できるから,

$$\tau_p \left( \tau_p^{q-1} - \left(\frac{q}{p}\right) \right) = q\alpha.$$

両辺に  $\tau_p$  をかければ, 命題 12.2 より

$$\pm p \left( \tau_p^{q-1} - \left(\frac{q}{p}\right) \right) = q\alpha\tau_p$$

を得る. 左辺は整数だから  $\alpha\tau_p \in Q$  であるが, 一方で  $\alpha\tau_p \in R$  だから補題 12.7 より  $\alpha\tau_p \in Z$ . よって合同式

$$\pm p \left( \tau_p^{q-1} - \left(\frac{q}{p}\right) \right) \equiv 0 \pmod{q}$$

が成り立つが,  $p, q$  が相異なる素数なので示したい合同式が得られる.

## 12.4 相互法則の証明

定理 12.6, 定理 12.2, およびオイラーの規準を順に用いて

$$\left(\frac{q}{p}\right) \equiv \tau_p^{q-1} = (\tau_p^2)^{\frac{q-1}{2}} = (-1)^{\frac{p-1}{2} \frac{q-1}{2}} p^{\frac{q-1}{2}} \equiv (-1)^{\frac{p-1}{2} \frac{q-1}{2}} \left(\frac{p}{q}\right) \pmod{q}$$

を得るが, 両端の辺は  $\pm 1$  だから等しくなければならず, 相互法則の証明が完了する.

ふう~, なかなか大変でした.

最後まで付き合ってくれた学生諸君に感謝します.

違う科目で, また会いましょう. ひとまず..... さようなら